

禅の友

Zen no Tomo

1

January 2025





ご本山だより
大本山永平寺
【転読大般若会】

てんどくだいはんにやえ

大本山永平寺
福井県吉田郡
〇七七六・六三・三一〇二



永平寺では元旦に「転読大般若」というご祈禱を行います。

折本になっていいるお経本を左右に扇のように開きながら、大きな声で読経をする法要です。同様の法要をご覧になったことがある方も多いことでしょう。

この法要は他宗派でも行われています。日本で初めて行われたのは和銅元(七〇八)年、元明天皇が災害の消除と国家平安を祈願して宮中や寺院で行われたのが最初とされています。つまり、仏教が日本に伝わってから間もないころから行われている行持なのです。永平寺で初めて行われたのがいつかは分かりませんが、おそらくここでも古くから行われているでしょう。

六〇〇巻もある大般若経というお経本を大勢の修行僧が手分けをして読みます。しかし声に出し一文字ずつ読んでいては間に合いません。そこで転読という方法を用います。

左右にお経本を扇の様に振りすべて

の頁をめくることで、その巻をすべて読んだこととしていいます。

転読をするにはうまくお経本を振ることが出来なければなりません。さらに特別な作法があり、偈文を唱えながら行わなければならないのです。

今では何事もなく行っている修行僧たちも、永平寺に入りたてのころは先輩和尚さんについていくので必死でした。この法要では、世界のあらゆるところにいらつしやる仏菩薩や鎮守、守護神にご供養をします。そして、世界の安寧と仏法の興隆を願います。ここで重要なのは、自分の利益を追い求めるためにご祈禱をするのではないということです。つまり、ありとあらゆるものが仏さまの教えによって救われ、平和になるようにと願うのです。

坐禅の修行は一人で行うものであり、独善的なものという印象もありますが実際はそうではありません。他者を思う大きな慈しみの心に支えられた修行なのです。



ご本山だより 大本山總持寺【新年の幕開け】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一



新年あけましておめでとうござい
ます。

新しい年の幕開けに、皆さまの幸せ
とご健康をお祈り致します。

旧年中は總持寺開祖・瑩山禪師七百
回大遠忌に多大なご支援をいただき
無事円成となりましたこと、感謝を申
し上げる次第であります。

今年よりは能登地震で被害を受け
た本山の祖廟であります總持寺祖院
の復興を進めなければなりません。幸
いに昨年度には大祖堂、仏殿、山門を
含む十六棟が国指定の重要文化財に
指定され、この決定が能登地方全域の
復旧への希望の光となればと願うば
かりです。

さて、大本山總持寺では新年を迎え

た午前零時に大梵鐘撞き初めより始
まり、仏殿での祝禱調經・大祖堂での
石附禪師さま御親修の元朝大祈禱が
順次行われます。

また大駐車場で交通安全を願って
自動車祈禱が行われ、共に五日までの
期間となっております。

また五日は寒の入りとなり、通常
ではこの日から「寒行托鉢」が始まり、
鶴見の街に修行僧の大き「寒声」が聞
こえてくるのも鶴見の毎年の風物詩
となっております。

そうした中「冬安居」と称される一
〇〇日間の修行期間も解制(終了)と
なり首座を中心とした冬の厳しい修
行を成し遂げた修行僧の安堵した表
情が見られることでしょう。

選・長澤 ちづ

父さんが居るから生きるお互いが生きる
意味となる九十半ば

兵庫県 佐伯 幸子

評 九十代半ばを迎えた夫婦が、互いに生きている意味を確認し合っている、そこに何か尊いものが流れているのを感じた。単純な言葉の稍たどたどしい反復が真に迫って胸を打たれる。

鉢底の小石を金魚つつきをりはつかにその音聞こゆる朝

広島県 徳永 進一郎

評 金魚が水槽の小石をつつく音を聞いている作者。朝の静寂が、秋の清涼感まで伝えてくるようだ。高齢の作者の鋭敏な聴覚にもおどろく。

◆ 野兔の跳ねて枯野を駆けゆけば玉ゆら光る一筋の道

鳥取県 眞山 博充

◆ 壁に舞うアンパンマンの置き土産樹と陸よ元気で居るか

静岡県 高尾 善五

◆ 遠くより近づいてくる顔見知り会釈を交わす距離を測りぬ

岐阜県 後藤 進

◆ 転がされ自転車何か嬉しそう土手の草にも遊ばれている

奈良県 鈴木 重雄

◆ 隣席に抱かるる赤子と見つめ合ひスマホ疲れの眼を癒したり

三重県 西村 廣視

◆ スイと来てスイと止まりし赤蜻蛉汝と我とはいかなる縁

鳥取県 徳本 義則

◆ 祖父の地に父建てし家の月見台遊びに来たれ父の御霊よ

静岡県 小原 温子

◆ 早朝のガラスをうつすら曇らせて冷えに困はる被災地の家

岩手県 阿部 照子

◆ 鳩一羽われに寄り来てパンもらう右足指が一本足りぬ

岩手県 千葉 喜恵

◆ 秋の陽に揃い作業着照されて道路工事に汗する人ら

秋田県 小松 紀子

選者誌

山荘の露台の手摺り洗いおり洗うそばから

虫わたりゆく

ちづ

作歌小見

眞山さんの下の句の豊かな詩心、高尾さんの名前の生かし方、後藤さんの心の機微の表現などベテランの方々の歌に刺激を受けました。鈴木さんの勢いよく転がってゆく自転車の擬人化には、そんな捉え方もあるかと興味深く思いました。